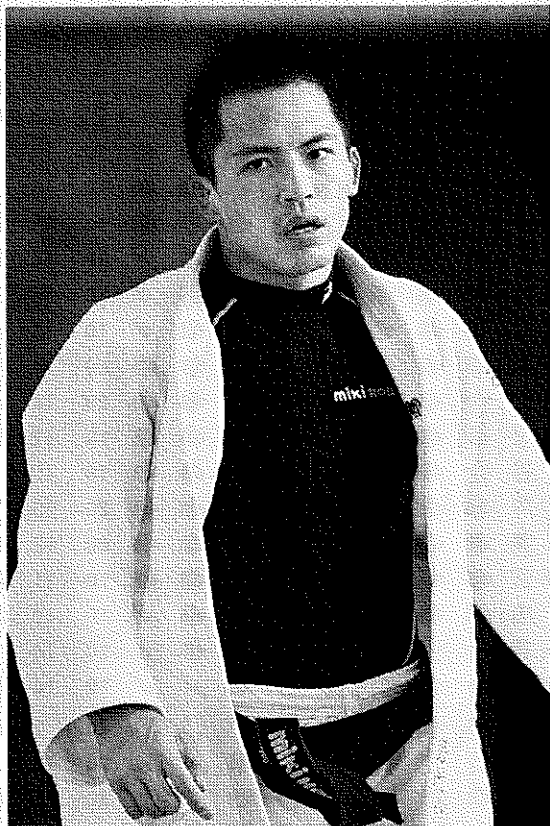


駆ける魂

柔道男子60kg級 野村 忠宏 (35歳) ①



大きな試合の前には鏡をのぞき込み、弱い自分と向き合っている

大きな試合の前、野村忠宏（ミキハウス）はいつもではない。弱い自分と真つとトイレにこもり、冷たい水で顔を洗って、鏡をのぞき込み、弱いな自分を確かめ、鏡をのぞき込み、弱い自分と向き合っている。試合の前夜は、一睡もできず、鏡をのぞき込み、弱いな自分を確かめ、鏡をのぞき込み、弱い自分と向き合っている。2004年のアテネ五輪で、決勝に逃げに終始するヘル

心の強さ アテネでつかむ

ゲアニ（クルジア）を圧倒した。長い歴史を持つ日本柔道にとっても、史上初の3連覇。畳の上に大の字になったままガッツポーズする息子をみた父の野村基次（天理高柔道部元監督）は、「これがヒロ（忠宏）の集大成だな」と感じた。本人も「心技体でいえばアトランタは体、シドニーは技、アテネは心で勝った」。得意の背負い投げで日本柔道の大トリを飾ったアトランタより、初戦からすべて別の技で頂点を極めたシドニーよりも、野村はアテネの勝ちが好きだ。「感覚的に、全然負ける気がしなかった。組み合ったどんな相手ものみ込んでいた」というからスキがない。心の強さをついに手にした味は格別だった。そんな野村も、天理大に入学した当初は気持ちにムラがあった。抜群の柔道セ

勝ち続けた自負、原動力に

ンスが、宝の持ち腐れにないかかわない。天理大の監督だった細川伸二（現教授、シロサンゼルス五輪金メダリスト）はある作戦に出る。海外で逆転負けした時は、もちろん、だらしな性格で寮内を歩いただけで大目玉を食らわせた。「ムキになつた時、一瞬目に宿る闘争心を、試合で出せばとんでもない選手になる」練習の残り時間を計算して手を抜くところも厳しく注意された。細川の目の前、柔道場奥の一角が野村の定位置になった。「もう限界です」と練習を逃れようとする時、「なんだ、その程度か」と細川が冷たくつぶやく。負けじと続けているうちに集中力がついた。アトランタからアテネまで、五輪の決勝戦は常に同じ日に試合がある女子の最軽量級、田村（谷）亮子の直後だった。これも宿命。